

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

学生主導型の改革・改善を 取り入れる大学

教育を提供する大学と、教育を受ける学生——。そうした既成の図式を打ち破り、学生自身がより良い大学づくりに能動的にかかわっている大学がある。学生の意見を直接吸い上げて改革の有効性を高めると共に、学生に課題解決の過程を経験させることでキャリア教育にもつなげている。

「教育は与えてもらうもの」という学生の意識を転換

授業改善や環境整備といった大学改革は、教職員主導で行われることが多い。授業評価アンケートなど、学生の声を吸い上げる仕組みは浸透しているが、それ以外に学生が教学内容の改革にかかわることは少ない。

そうした中、学生が主体的に改革・改善にかかわる仕組みを取り入れる大学がある。これは、大学改革をより効果的なものにするだ

けでなく、「教育は与えてもらうもの」と考えがちな学生の意識を変え、当事者意識を持って能動的に動く学生を育成するという狙いもある。社会が求める人材は、まさにこうした学生である。今号ではそうした取り組みを二つ紹介する。

授業や教育環境を 学生主体で改善する

岡山大
「学生参画型の教育改善」

「知ってるつもり？ コンビニ」
「君は頭が良くなりたいか」発信

力」などの教養教育科目の新設、新入生対象の履修相談会など、岡山大には学生の提案を基に実現した大学公式の取り組みがある。推進主体は、学生約30人と教職員十数人から成る「学生・教職員教育改善専門委員会」で、他の教職員主体の委員会と同等の決定権のある組織だ。この取り組みは、2005年度から4年間、文部科学省の特色GPに選定された。

岡山大が学生参画型の教育改善組織を立ち上げたのは01年度のこと。授業改善に組織的に取り組む必要性が叫ばれ始めた時だった。

教育開発センターFD部門長の橋本勝教授は、「本学では比較的早くから教育改革の意識がありましたが、教員だけの活動には限界がありました」と振り返る。教員がよかれと思って行う授業が、必ずしも学生が力を付ける授業とは限らない。授業に対する学生の意見を聞くことで、教員間に授業改善の基準などが浸透するのではないかと考えた。橋本教授は、「そのためには授業を受けている学生自身の意識を高め、彼らを改革に巻き込む必要があると感じました」と話す。そこで、継続的に教育改善

図1 岡山大 学生・教職員教育改善専門委員会の活動内容

ワーキンググループ	主な活動内容	主な成果
授業改善	・授業の改善に関する活動 ・新しい授業の創作に関する活動	「This is Okayama」「君は頭が良くなりたいか～発信力～」(いずれも2008年度)「知らなきゃばい、大人のマナー」(09年度)などの教養教育科目を開講
システム改善	・物理的な勉学環境の改善 ・修学上の制度の改善	履修科目登録数の上限を決める制度などについて、各学部で調査を実施
学生交流	・教育改善学生交流の開催 ・新入生のための履修相談会の実施	02年度から毎年、新入生のための履修相談会を開催、教育改善学生交流(i*See)を開催

*大学資料を基に編集部で作成

にかかわる組織「学生・教員FD検討会(当時)」を立ち上げた。学生委員の任期は1、2年生の2年間で、全11学部からそれぞれ1人以上が選出される。選出方法は学部任せられ、教員や学生委員が説明会を開いて立候補を受け付ける学部

や、ジャンケンで決める学部とさまざまだ。橋本教授は「熱心な学生に限らず、いろいろな意識の学生がいた方がよいと考えています。多くの学生はそれほど学習に熱心ではないという前提に立っているため、多様な意見を聞きたいからです。ジャンケンで負けて仕方なく参加したものの、活動しているうちに熱心になる学生もいます」と話す。

学生委員はワーキンググループ(WG)に分かれて活動する。ここでは、教職員がテーマを提示せず、学生自身の問題意識を重んじる。WGの内容は年度により異なり、10年度は「授業改善」「システム改善」「学生交流」の三つのWGがある(図1)。活動はすべて学生に任せるが、月1回は学生と教職員による全体会議を開く。この会議での決定事項が全学の方針となるため、教職員は学生の議論の方向や企画内容に鋭い指摘をする。

最初は教職員にリードされながらも企画が実現することによって、学生は達成感を感じる。その過程が学生を大きく成長させ、次の活動につながっていくという。

より良い大学づくりを目指す 実現可能性にこだわる

委員会発案による正課科目は、これまで延べ9科目が開講された。これは、1セメスター全15回で行う教養教育科目で、委員会は授業内容や評価方法などを企画し、担当教員は公募で学生による面接で決定する。今まで開講された科目は、大学のダイプロマ・ポリシーと合致するものと判断されている。

学生が提案するといっても、単に自分たちが楽しめる授業をつくるわけではない。授業を受けるのは発案者ではなく後輩となるため、学生は次の世代に何を残すのかという視点で内容を考えるという。

開講された科目の中でユニークなのは「大学授業改善論」だ。授業内で学生が数人のグループをつくり、自分たちの履修科目から一つを選び、授業改善の意見書をまとめる。意見書を「大学授業改善論」の授業で発表し、受講者の過半数が賛同すれば、教員に直接交渉するという内容だ。毎年十数人の教員に改善を提

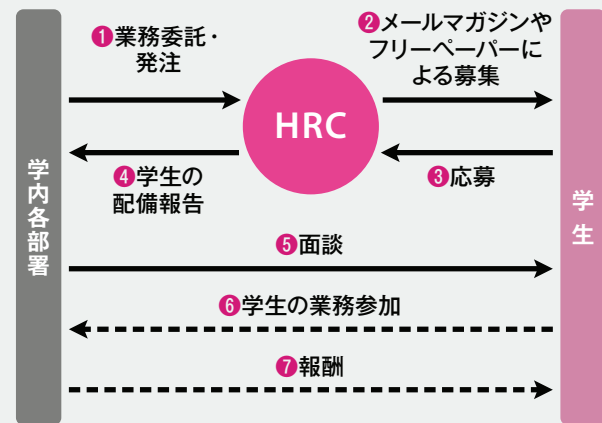
案している。

学生発案の企画が、大学公式行事として定着したものもある。02年度に始めた新入生向けの履修相談会だ。この行事の立ち上げにかかわった学生委員1期生で、現在は担当教員の山内源氏は、「新入生が授業内容を理解していないまま履修登録している状態を改善しようと始めました。今は公式行事として全学で開いています」と話す。

学生交流WGの新リーダーとして11年春の履修相談会の準備を進める工学部1年の川田純也さんは、「入学当初、授業や履修相談会に不満がありました。いざ自分がそれを変えられる立場になると、責任の大きさを感じます」と気を引き締める。

今後の課題は、委員会の知名度を上げることだ。理学部1年の秋吉秀彦さんは「学内で委員会を知る学生はほとんどいないため、イベントなどで周知を図っています」と話す。また、学生委員が1、2年生のため、ノウハウの継承が難しいことも課題だ。3年生や大学院生に引き続きかわってもらおう仕組みづくりを模索している。

図2 嘉悦大 ヒューマン・リソース・センター (HRC) の役割



HRCの運営は3人の学生が行う。オフィスはなく、インターネットでの作業が中心。各部署からの募集に対し、充足率はほぼ100%だ
*大学資料を基に編集部で作成

大学の運営や改善に 学生が参加する

嘉悦大「学生が大学運営にかかわるプロジェクト活動」

嘉悦大には、学生発案の企画に大学が予算を付けて事業化し、学生自身が運営している活動がある。

その一つは、「ヒューマン・リソース・センター (HRC)」という学内人材派遣センターだ。オープンキャンパスの学生スタッフやコンピュータ室のアシスタントなど、大

学は自学の学生をアルバイトとして雇用する機会が多いが、HRCはそうした学生スタッフを各部署に紹介する業務を行っている(図2)。以前は、各部署がそれぞれ募集していたために効率が悪く、応募者が少ないことから人材のミスマッチも多かった。そこで、雇用窓口を一本化して効率化を図ると同時に、HRCの運営学生と学生スタッフ双方のキャリア形成を支援しようと、09年に設立された。

学長補佐の杉田一真専任講師は、

「本学の周囲には中小企業がたくさんあり、近隣からの入学生も大勢います。地域に還元する人材を育てることが本学の果たすべき使命だと考え、学内で学生のキャリア形成の場が持てないかと模索していました」と話す。

派遣先は、図書館やパソコンのヘルプデスク、オープンキャンパスの運営スタッフなどさまざま。授業の空き

時間を利用して働けることもあり、人気業務には応募者が多く、厳しい選考がなされるという。杉田講師は、「社会に出る前に選抜される経験をしてほしいと思っています。もし選考に漏れたとしても、次にまた挑戦しようと思えるように、HRCのスタッフや教員がフォローできます。そうした積み重ねが、学生の成長につながると考えています」と話す。

更に、学生同士のタテの学び合いを促すことも、この活動の狙いの一つだ。例えば、各業務の新人スタッフの育成は、先輩の学生スタッフに任されている。杉田講師は、「最初にロールモデルとなる学生を育てることまでが、教職員の仕事です。ロールモデルとなった学生が見込みのある後輩をスカウトし、育成することによって、その後は教職員が手を掛けなくても、学生のみで自立的に運営されていきます」と説明する。

キャンパスの美化を 学生プロジェクトで実現

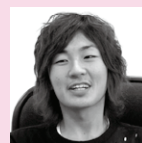
もう一つ代表的な事業である「コ

ロキレイプロジェクト」は、学生のマナー向上を目的として、十数人の学生スタッフが、毎日交替で昼休みにタバコのポイ捨ての本数を調査しながら清掃するという活動だ。09年夏に、経営経済学部3年生(当時)の根本大輔さんが、大学に対する地域住民からの評判の悪さを目の当たりにしたことをきっかけに立ち上げた。

「杉田先生の授業で学内のフリーペーパーを制作する課題に取り組んだ時、近隣の商店を数十軒回って広告の掲載をお願いしましたが、すべて断られるという苦い経験をしました。その一因には、学生のマナーが悪く、地域に迷惑をかけていたことがありました。マナー向上のために何かしたいと杉田先生に相談したところ、予算を付けて事業化することになったのです」(根本さん)

プロジェクト名には、対症療法的に喫煙マナーを改善するのではなく、誰に言われなくてもマナーや礼儀を守る大学にしたいという願いを込めた。現在は活動の効果もあり、喫煙マナーは確実に向上した。また、大学の予算で運営しているた

後輩たちのためになる
授業を計画中



岡山大
工学部機械工学科1年
高橋雄大
(愛媛県立西条高校卒業)

私は、どちらかといえば学習よりも大学生活を楽しみたいと思って入学しました。学生・教職員教育改善専門委員会のことは知りませんでした。高校で同級生だった川田君(本文に登場)に誘われて委員になりました。

今は、授業改善WGで授業評価アンケートの改善に取り組んでいます。例えば、本学ではウェブサイトを使っていつでも授業に対する意見を送れるシステムがありますが、利用者はほとんどいません。どうしたら利用が増えるのかを模索しています。

活動の中心は2年生で、私自身はまだまだサポート的な立場です。それでも先輩と一緒に活動したり、イベントで教授や他大学の学生と話したりしているうちに、この委員会が面白いと思えるようになりました。

授業改善WGでは、11年度に教養教育科目の新しい授業づくりに挑戦しようという話を持ち上がっています。学生が欠席したり、居眠りをしたりせず、面白いと感じて参加してもらえようという授業をつくるのが目標です。

HRCなどを通じて
周りの学生に影響を与えたい



嘉悦大経営経済学部
経営経済学科3年
関谷朋美
(東京都・白梅学園高校卒業)

2年生の時にHRCの設立に携わって以来、センター長を務めています。

この大学が第1志望ではなかった私は、入学当初はあまり意欲的ではありませんでした。このままでは自分が駄目になると感じていた時に、キャリア教育を推進するNPO法人カタリバによる初年次教育に参加し、「自分で大学をつくり変えていけばいいんだ」と気がきました。杉田先生から「学生を生かさせさせる組織をつくるから、参加してみませんか」という話があり、HRCを立ち上げました。最初は試行錯誤の連続。認知度が低く、募集しても学生が集まらないこともありましたが、そこでポスターの掲示や冊子の配布、口コミなどで周知を図っていききました。

私はHRCの他にもカタリバの活動やアルバイトもしています。一つのことを始めて楽しくなると、いろいろなことに挑戦しようという意欲が湧いてきます。高校時代は内向的で人と話すのが苦手だった自分が大きく変わりました。将来は人の力を引き出すような人事の仕事に就きたいと考えています。

め、活動の経過をレポートにまとめ、大学に報告している。

根本さんが2年生だった08年度は、新学長が就任し、大学改革が始まった年でもある。根本さんは、「講義形式の授業が大幅に減り、プレゼンテーションやディスカッションが増えました。大学の雰囲気が大きく変わり、今では学生の顔つきが当時とは全く違います」と話す。

「どちらの取り組みも、制度をつくってから参加者を募集したわけではありません。起点となるのは、授業です。初年次教育で基礎学力をしつかり付けた上で、専門科目で学生の心に種をまき、具体的な活動として花開かせるのが授業外というわけです。そして、活動に必要な知識や技能が分かったら、再び授業で学びを深めるというサイクルにしています。この一連の流れを大学が提供することで、教員が学生のキャリア形成を支援することが可能になります」(杉田講師)

現在、それぞれの活動は後輩への引き継ぎ方法を模索中だ。HRCはいずれ株式会社化し、学外に学生を派遣したり、学外の人材を学内に派

遣したりといった事業展開を構想している。

進路指導に生かす

教育や改革への
本気度を知る手掛かり

大学の改革に学生を巻き込む方法や、巻き込む学生像は異なるが、共通しているのは、改革・改善に学生を参加させることで、改革を効果的なものにするだけでなく、社会で通用する学生を育てるといった教育的側面だ。

大学が、どのような意図を持ち、どこまで深く学生を参画させているのか。これは改革や教育に対する大学の本気度を知る大きな手掛かりになると共に、大学のキャリア教育に対する姿勢を見ることが出来る。進路指導の際には、大学改革や授業改善の方向性だけでなく、プロセスにも注目してほしい。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp